

本来なら四月十九日に、「鯉のぼりを揚げる式」を行うはずでした。例年、各学年A組の白の一番後ろの児童、計六名が屋上に上がり、校務員さんのお力をお借りして、鯉のぼりを揚げ、グラウンドでは、児童・教職員皆で、「屋根より高い♪」と、鯉のぼりの歌を歌っていました。薫風の中、空に泳ぐ鯉のぼりを見て、皆笑顔になったものです。

今年もそれが実施できず…。そこで二十一日の朝から、校務員さんに鯉のぼりを揚げていただきました。月曜のオンライン朝礼では、子どもたちに、鯉のぼりの話をいたしました。

鯉のぼりを揚げるようになったのは、今から四百年以上前の江戸時代の頃から。最初は黒い真鯉一匹だけの鯉のぼりでした。（確かに歌川広重の浮世絵には、真鯉一匹の鯉のぼりが、江戸の空を悠々と泳いでいる姿が描かれています。）そもそも、何で「鯉」なのか。これは、中国は黄河上流、竜門山から流れる川を登りきった魚は竜になるといふ言い伝えがあり、その急流を登りきったのは唯一鯉だけだったのだそうです。

そこから、竜に「出世」した鯉の強さにあやかりたいと、「鯉」を揚げるようになったという訳です。ちなみに、「登竜門」という言葉は、ここから出た言葉です。

最初は真鯉一匹の鯉のぼりでしたが、だん

だん派手になり、何匹もの鯉が泳ぐようになりました。鯉のぼりが取り付けられているボールの一番上には、ボールのような丸いものが。これは、この下には子どもがいます。お守りくださいというしるし。丸い物の下の「矢車」は八本の矢のデザイン風の風車。四方八方からの魔物を防ぐ「魔よけ」。真鯉の上のひらひらしたものは、「吹き流し」。

昔からの色は、「青・赤・黄・白・黒」で、これは竜が嫌う色。鯉が竜に食べられないようにという魔よけの一つです。

結局、鯉のぼりは、子どもたちが、病気になる「魔物」に取りつかれることなく、元気にすくすくと成長して、立派な大人になってほしいとの願いを込めて、揚げているという訳なのです。

鯉のぼり↓こどもの日と言えば、「柏餅」。

「柏」という字は、「きへん」に「白」。白は、ドングリのような実を表します。柏の木には確かに、ドングリのような実があります。

柏の葉は古くなくても茶色くなったまま木に残り、新しい緑の葉が出てから落ちるといふ性質があります。そこから、家が代々続いていくという願いを込めて、お餅に巻いているということ。もちろん手がべたべたしないようにとか、柏の葉に含まれる「オイゲノール」という成分が、お餅を腐りにくくしているという、実用の面でも役立っているという

ことも伝えました。柏の葉は、ツルツルして緑が濃い方が表。ザラザラして葉脈が目立ち、白っぽく見える方が裏。

裏が見えるように包んである柏餅には、小豆あんが、表のツルツルした方が見えるように巻いてある柏餅には、みそあんが入っているはず。店によって違いはあるようですが、昔から続くお店は、このように区別しているようです。



もうすぐハーフタムホリデーが始まります。今年の休みはどこかへ出かけることは難しいかもしれませんが。近くの公園で気になる木があったら、その漢字を調べてみる。柏餅を食べ比べして、お店の人に葉の表・裏の件をインタビュしてみる。

「鯉」のように「さかなへん」の付く漢字もたくさんあります。魚を食べたら、その漢字を調べてみると、ギョツとするような字に出合うこともあると、お話ししました。

そして、「柏」によく似た「栢」という字、何と読むのかも質問しました。

よくよく見てみると、身の回りにも研究テーマというものは、無数にあるものなのですね。

(立教小学校校長 田代 正行)